



# Аgora アゴラ



1994年1月 第58号

鶴見大学図書館報

## 蔵書は文化遺産である

歯学部助教授 石井淑夫

昭和初期、小樽市に越中屋というホテルが誕生した。高い天井と玄関に飾られたステンドグラスが大正時代に特有な落ちついた華やかさを漂わせていた。ニシンで潤った町は日本銀行や都市銀行が店を並べ、小さいながらも発展する北海道で、中心的な存在となっていた。このホテルは町の中心にあって、繁栄の象徴でもあった。後に小樽市歴史的構造物に指定されたのであるが、そのホテルもいつしかさびれ、かろうじて製缶会社の所属となり、建物だけは保存さ

れることになっていた。時代は移り、つい何年か前のバブル経済が訪れた。市は御多聞にもれず、ハイテク産業の誘致に躍起となった。やがて一社が名乗りをあげ、市内に研究所を建て、ホテルをゲストハウスにするため昭和初期の姿を忠実に再現した。ホテルは昔のように市の正式な招待客などを泊める為にも使われた。全国各地のハイテク関連企業が研究所を見学してはゲストハウスを利用した。今日、明日の役には立たないが、21世紀に花開くであろう技術ばかりを狙っていた。そこにバブルの崩壊。この研究所も今は身売りの身となった。私も縁あって何度かホテルを訪ねた。泊めて貰ったこともあった。歴史を聞かされていた為か、そこでの一泊には強く印象に残るものがあった。一言で言えば、「今、この文化遺産を使わせて貰っているんだ」という感慨であった。

個人的な話を冒頭に出したが図書館の蔵書も

### 目 次

蔵書は文化遺産である……………石井淑夫…	1
貴重資料紹介 そのXⅦ	
—源氏物語関係資料7— 高田信敬…	4
新刊あらかると……………	10
図書館だより……………	12

文化的遺産という意味で共通するように思える。本学図書館には貴重本が多数保存されている。これらの本は購入したものである以上、確かに本学の所有であるが、同時に大切に保管して後世に伝えなければならないという義務を負わされたものといえる。複製が多数存在している学術雑誌といえど図書館に受け入れた以上は文化的遺産と考えたい。利用者のこうした取扱いが図書館の風格を作り上げてゆくのであろう。少し前の話であるが貴重な絵画を買い入れたはいいが、死ぬ時には棺桶に入れて一緒に燃やして呉れと言った人が居た。そのような人に風格など感じられないばかりか、どんなに金を積んでもゴッホやルノアールを所有する資格は無いと感じた。ただし後日談として前言を撤回したということであった。少しホッとすると同時に、その人にもほんの少し威厳がついたように感じられた。

本学に歯学部が創設された直後、理工系の学術誌らしいものはほとんど本学図書館には見当らなかった。そんな時、鍋谷先生を通してかなり多くの学術誌の寄付を受けた。寄贈を前にして話し合いの結論は、戴く以上は今後共継続して購入できるように最大限の努力をすべきだということになった。勿論、それらの雑誌バックナンバーは我々にとっても有益なものであったが、それ以上に文化遺産として、そうすべきであると感じていた。幸い我々の希望は通り、戴いた学術誌はすべて継続購入が実行され、現在に至っている。

本学では年々学術誌のバックナンバーを充実させて来ている。これらは、いづれも前歴を持っていて本学にたどりつくまでも多くの利用者に接していたに相違ない。冒頭のホテルや蔵書の一冊一冊があたかも狂言まわしとして利用者の織りなすドラマを綴って来たと見る事ができないだろうか。

学術誌を継続購入することによって、もうひ

とつの社会貢献をしていることにも気づく。たとえば歯学会関連の雑誌を購入するということは、図書館利用者の利益になると同時に、その分野に対する財政的な援助をしていることになるのである。従来、必要な情報を得る為には該当する雑誌を直接調べなければならなかった。最近になって少し様子が変わってきた。特に二次資料といわれる雑誌類はコンピューターによる検索の普及によって著しく必要性を減少しているかに見える。必要な情報は図書館に二次資料を置いてなくても電話回線によって調べることができるようになった。そこで二次資料の購入をやめる図書館が多くなっているとのことである。雑誌を売る時代から情報を信号にして売するという時代に移行してゆくのであろうが、過渡期における混乱が少なければと願う。書籍代の値上りと、バブル崩壊後の財政圧迫でどこの図書館も苦しくなっている。おそらく本学図書館においても財政圧迫は避けられないであろう。そのうち、どうしても今まで継続購入してきた雑誌の一部は継続を断念せざるをえまい。そのような時に利用度という尺度に加えて学術的文化的価値という尺度も忘れないようにしたいものである。

通常、検索は人名や物質名、学術用語などによるキーワードが利用される。文献調査の仕方はキーワードだけではなく研究者によっていろいろ癖があるようである。学会、耳学問といった文献に頼らない割合もかなり大きいのであるが、いくつか代表的なものを書くことにする。第一に目次を読んでゆく方法。これは一次資料が図書館に無くても原理的には調査が可能である。たとえばコンテンツサービスによって目次だけをコピーしたものを入手すれば済む。何年か前までは、代表的な雑誌の目次だけを一冊の本にして出版していたものも広く利用されていた。第二に情報専門の出版社の出す分野別のサービスを受けること。バブルの頃には特定の



研究室と契約して、その部屋から公表される情報はすべてコピーして渡されるといった方法が重宝がられたりした。最後になるが最も原始的で多くの方の愛用している方法がある。本屋の立読みで見かけるポーズ。本の端に手をかけて頁をパラパラと落してゆく方法である。私の場合、一枚ずつ頁を操ってはいるが、主としてこの方法を使っている。題名や文章にはおかまいなしに図や表ばかりをながめてゆく。数式も同様に図的感觉で見ることにする。好きな形をした数式や図が見つかったら選び出すことにしている。この方法を使いたければどうしても一次資料を直接見なければならない。従って検索で調べた文献を外注によって入手するというわけにはいかない。どうしても一次資料だけは必要なのである。ただし文献検索の手段が発達することは私にとっても大いに好ましいことである。コンピューターの容量が増大すれば、一次資料の頁を指で操ってゆく感覚を、モニター画面上に真似することも可能になるかも知れないからである。

以上に、文化的遺産としての学術誌について述べ、研究者側から見た学術書について触れたが、人数的に言えば、図書館の質を決定するのは学生である。そこで最後に学生側から見た図書館あるいは図書ということで考えてみる。

最近、「マーフィーの法則」なる本に人気がある。私も開いてみた。「学期末レポートとマーフィーの法則。学期末レポートの完成に不可欠な文献や学術誌は、図書館から紛失している。」「補足：入手できても、もっとも大切なページが破られている。」（アーサー・ブロック著・倉骨彰訳、p126、アスキー出版、1994より）実際にそんな経験を持つ読者も居られるのではなかろうか。本学図書館においても、この種のことが残念ながら起きたことがある。この法則は我々に三つの問題を提起している。第一に大学図書館には、講義に直結した資料が要望され

ていること。それも、誰もが参考書的に使えるようなものに人気があるということを端的に示している。第二に、自己中心的な学生が居ることを示している。第三に図書館が犯罪に対して如何に無力であるかということを示している。第一の問題に関していえば、本学においてもこの種の資料は重視されている。図書委員会から先生方に、講義に関連した学術誌等の要望を出す機会が定期的に与えられている。ほとんどの要望が認められるので、他大学と比較しても、一段と充実している部分といっても良い。ただし財政上に占める割合は小さく、あまり大学の負担にはならないように思える。第二の問題に見られる不心得の学生についてはいつも悩まされる。不心得な利用者がいる為に今の図書館が使いにくくなっているとしたら残念なことである。そこで第三の問題が生じる。マーフィーの法則が作られた頃から較べると、検閲機構の発達により、かなり好転しているかも知れない。無断借用の書籍を持って図書館出口に立つとブザーが鳴るなどの防衛設備が作られている。また複写設備の充実などで悪い事をしないで済むようになってきた。本来、大学は警察と違って犯罪に対しては無力である。図書館側としては不心得な学生が居ても悪いことをしないで済むような環境を作って、それを習慣にまで高めるよう促すことで精一杯である。

本学図書館は利用度が高いわりには不祥事が少ない方だと思う。運営もガラス貼りで利用者の意見も反映しやすい。それだけに学生を含めた利用者全体が図書館の質を決めてゆくことになろう。私も利用者の一人として質の高い図書館づくりに協力してゆきたいと思う。

## 貴重資料紹介 そのXVII

### 源氏物語関係資料 7

文学部助教授 高田 信敬

陸続と、と言うほどではないにしても増加する源氏物語資料のうち、近年書庫の一隅に確かな地位を占め始めたものに古筆切がある。本文・注釈等まとまった分量を持つものの紹介はかなりの部分を終えたので、伊勢・狭衣・栄花物語等の断簡も含めて、古筆切の略解題を試みたい。

#### 41 源氏物語 空蟬 伝称筆者不明

斐紙六半切（15.5cm×15.3cm）。青表紙本系の本文を1面10行17字程に書く。列帖装を分割したもの。極札・裏書なく、伝称筆者名による搜索は出来ないが、書風から見て鎌倉後～末期の写であろう。朱点少々。空蟬と軒端萩の碁を打つところをかいま見た光源氏が戸口に出て来る場面で、『源氏物語大成』88頁11行目以下に相当。

#### 42 源氏物語 若紫 伝寂蓮筆

斐紙六半切（16.5cm×15.2cm）。極札・裏書等はないが次の切とツレであり、しかもわずか半丁を隔てるのみのごく近い関係。したがってこの断簡も「伝寂蓮筆」とした。両者まったく別の経路で本学図書館に収蔵、その状態から見てごく近年の分割と考えられる。河内本系統の本文を1面11行16字程度に写す。鎌倉中期の写か。なかなか力強い書風である。寂蓮の筆跡では無論ない。『源氏物語大成』181頁2行目以下に相当し、丁のオモテ面で、ウラ面が出現すれば次の断簡（次丁オモテ面）とぴったり接続するはずである。資料の不思議な出会いと言えよう。河内本——現存諸本に全同ではない——らしさのよくあらわれた部分を示し、『大成』底本と比べてみる（表記は私）。

・人の御けしきありさまもおほしむるへくもあ

らすなかそらなる（伝寂蓮筆六半切）

・人のおもむけをもみしり給はすなかそらなる  
（大成底本）



#### 43 源氏物語 若紫 伝寂蓮筆

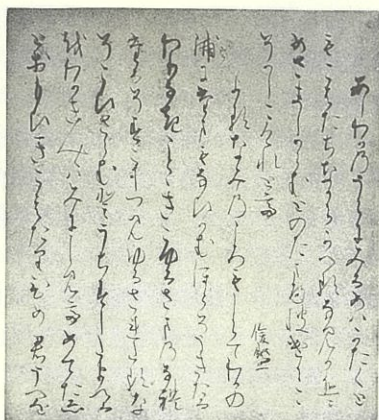
斐紙六半切（16.5cm×15.1cm）。河内本系本文を1面11行16字程度に書く。列帖装を分割したもので、元来かなりまとまった量が伝来したものらしく、寂蓮（？ ～1202）筆と鑑定した極札か折紙かが付けられていたと思われ、付属の飯島春敬墨書メモに「寂蓮法師筆／源氏物語

若紫／文化十二年初夏仲旬 古筆了意極 春敬〔印〕」と見える。紙中に別筆細字で「俊成卿」と墨書するのは、鋭角的なその書風を俊成に比したものであろう。前述のように河内本系統であることが注意を引く。『源氏物語大成』181頁11行目以下に相当、河内本の特徴のよくあらわれた部分を翻字し、『大成』底本と並べてみる。

・わかき人々はみにしみてめてたしとおもひき  
こえたりひめ君うへを（伝寂蓮筆六切半）  
・身にしみてわかき人々おもへり君はうへを  
（大成底本）

なおこの断簡は、本学非常勤講師川越敏子（号敬楓）先生より御寄贈いただいたものである。





#### 44 源氏物語 葵 伝冷泉為相筆

斐紙六半切 (16.5cm×15.2cm)。列帖装のオモテ面に相当か。青表紙本系——部分的に別本らしいものが見られる——を10行19字程度に写す。朝倉茂入の極札「冷泉殿為相卿わつらひたまへは〔印〕」、鎌倉中～後期の写しであろう。

伝為相筆の源氏物語切は比較の数多く残っており、『新撰古筆名葉集』にも、掲出の切とは関係なかろうが「同(六半)源氏朱星アリ」と見える。

別本と接触したらしい部分を諸本と比較してみる。

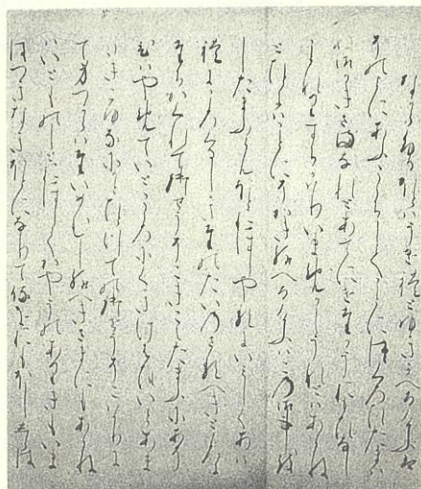
- ・ いとといみしき御いのりのかすをつくして (掲出六半切)
- ・ いとゝしき御いのりのかすをつくして (大成底本)
- ・ いとゝいみしき御いのりのかすをつくして (別本の御物本)

#### 45 源氏物語 賢木 伝藤原為家筆

斐楮混漉大四半切(紙高30.3cm) 2枚を継いで一幅に仕立てる。極札・裏書等はないが、ツレには為家(1198～1275)の極めが付けられるので、それにしたがう。堂々たる書品の列帖装四半本であったかと思われ、小松茂美『古筆学大成』23にツレ4葉——7葉一括掲出するも、うち3葉は別手であろう——が収められるし、山岸徳平『尾州家河内本源氏物語開題』口絵図

版も賢木5行と竹河2行を継いだツレである。

さて、為家の筆跡ではないものの、ほぼ同時代の写と推されるこの切、書写年代の古さから言っても珍重に値いするのだが、さらに注目すべきは本文が河内本であること。書物の大ききと言うきわめて外形的・即物的な問題が、存外内容にかかわってくることをついでに書いておくと、鎌倉時代写の源氏物語は、その完本たると断簡たるとを問わず六半本——所謂升形本——がほとんどである。少々の四半本——現行のA5版に類似した大きき——も存在するが、もっと稀なのは縦1尺を越える大四半の本で、たとえば正嘉2年(1258)写の尾州家本がその代表となろうか。しかもこの大型本、河内本系本文を持つのを通例とするのである。河内本に多く見られる朱の句読が、勿論伝為家筆切にも存する。横幅24cm程度1面11もしくは12行の写本であったろう。現在の右側5行分と左側8行分は、しかし連続するものでなく、継ぎ方が誤まっていて物語の進行と合致しない。すなわち『源氏物語大成』364頁8～11行、同じく335頁3～7行に相当し、一種の錯簡と評しうるものである。なおツレは、賢木・薄雲・真木柱・竹河に及び、源氏物語の相当な部分を一人で写していることになる。

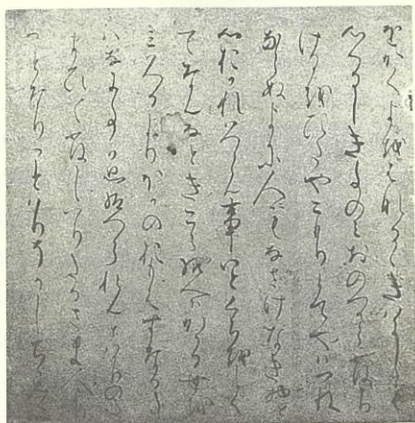




#### 46 源氏物語 須磨 伝称筆者不明

斐紙六半切 (15.6cm×15.1cm)。河内本系の本文を1面10行15字程度に書く。列帖装を分割したものらしく、極札・裏書がないので伝称筆者は不明だが、鎌倉後期の写しであろう。『源氏物語大成』402頁5行目以下に相当。

河内本の特徴のあらわれる部分を並べておく。  
・心おかれはへらん事いとくちをしくてなん・  
心をかれはてんといとおしうてなむ(大成底本)



#### 47 源氏物語 若菜上 伝称筆者不明

斐楮混漉六半本 (14.5cm×14.5cm)。青表紙本系本文を1面11行15字程度に書く。極札・裏書等はない。鎌倉中～後期かと思われる細身の個性的な書で、類似のものは西行と極められることが多い。『源氏物語大成』1047頁13行目以下に相当、女三宮の処遇をめぐる光源氏と朱雀院が言葉を交す場面である。

#### 48 源氏物語 柏木 伝称筆者不明

斐紙六半切 (16.3cm×16.6cm)。青表紙本系本文を12行20字程度に書く。ただし列帖装のうちから1紙を抜き、1丁と1行分残してあとを切り離したもので、ウラ面とあわせ全24行。元来は毎半葉11行書写。装訂様式のゆえもあって綴じ目を境にした左右の内容は連続しない。今分量の多く残る部分を基準にオモテ・ウラを決めると、『源氏物語大成』1153頁13行、1158頁11行～1159頁9行、1153頁1行となる。

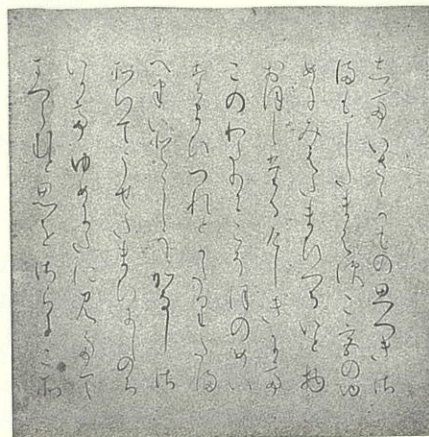
極札・裏書等を欠くも——書物より抜きとったままで表裏に分離させてもいないから、古筆切とは言にくい形態であり、したがって極札のないのは当然——、書風より見て鎌倉後～末期の写しであろう。大略青表紙本の枠内に収まるものと考えられるが、まあ次のような独自異文あり。

・おたしきけはひ (掲出六半切) 一をゝしきけはひ (大成底本) 一をかしきけはひ (別本の国冬本・阿里莫本)

#### 49 源氏物語 総角 伝世尊寺行能筆

斐楮混漉六半切 (16.6cm×16.5cm)。『新撰古筆名葉集』に「六半 源氏」と見え、『古筆切目安』(静嘉堂)に「六半切 新極札も出来上」とあるもの。古筆了厓 (1645～1701) の極札「世尊寺行能卿していさゝかもの〔琴山〕」を付す。極札の裏に「切 丙子三 〔了厓〕」とあり、元禄9年 (1696) の鑑定と判明する。別本、特に平瀬本に近い本文を10行12字程度に書き、鎌倉中～後期の写しであろう。

古筆名葉集の類に掲出されるほどの切にふさわしい、平安時代以来の伝統を感じさせるゆったりとした書風で、かなり愛玩されたらしくツレも相当数報告されている。小松『古筆学大成』23では総角・手習にわたる10点が掲載され、鎌倉時代にさかのぼる別本資料として貴重な断簡と言えよう。





『源氏物語大成』1649頁12行目以下に相当、別本の特徴がうかがえる個所を引いておく。

- ・うせたまひにしのちいかてゆめにたに見たてまつらむと（伝行能筆六半切）
- ・うせ給てのちいかて夢にもみたてまつらむと（大成底本）

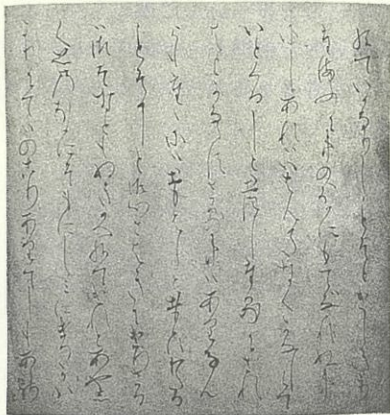
なお行能（1179～1251）は行成八代の孫、『明月記』にも能書の誉れ高かったことが見え、この人以降世尊寺を家名とするようになる。

#### 50 源氏物語 宿木 伝藤原為家筆

斐紙六半切（15.9cm×15.3cm）。極札を欠くが裏書に「為家」とある。勿論為家の筆ではなく、鎌倉後期の写しであろう。別本の陽明文庫本に近い本文を1面10行16字程度に書く。『源氏物語大成』1744頁3行目以下に相当、匂宮が中の君と薫との仲を疑う場面である。

先に記した如く別本の枠に入るべき本文のように思われるが、わずかの分量では確定しがたい。次にこの切の独自異文らしいものを示しておく。

- ・いはんかたなくななくて（伝為家筆六半切）
- ・いはんかたなくわりなくて（諸本）

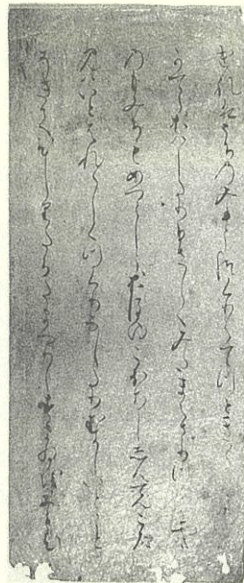


#### 51 源氏物語 東屋 伝阿仏尼筆

斐紙四半切（23.6cm×9.5cm）。別本かと思われる本文を1面5行23字程度に書くが、元来は毎半葉7行前後の列帖装であったか。右端を裁ち落としている。極札はなく、裏書「阿仏尼」。

鎌倉中期の流麗な筆跡である。『源氏物語大成』840頁10行目以下に相当、本文系統を云々するには量的に不足と言えるけれども、特徴的な部分を示しておく。

- ・みかてらおはしたりひさしう（伝阿仏尼筆四半切）
- ・身つからおはしましたりひさしく（大成底本・河内本）



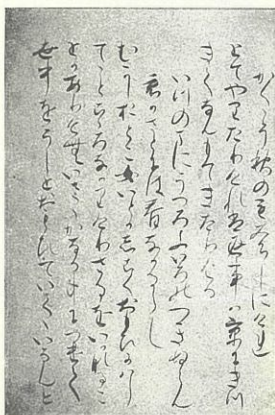
#### 52 源氏物語 夢浮橋 伝世尊寺行能筆

斐紙六半切（16.5cm×16.8cm）。青表紙本系本文を1面11行18字程度に写す。古筆家の手になる本格的な極札ではないが、「いとかかることはけに世尊寺行能卿〔花押〕」と記した小紙片を付す。後京極風の流れを汲む書ではなく、やわらかい筆跡、行能の手ではあるまいが鎌倉後～末期の写しではあろう。『源氏物語大成』2070頁1行目以下に相当し、この面のウラで大尾となっていたはず。薫の使者として小野の里を訪れた小君が、姉浮舟とも逢えず空しく帰京しようとするところである。大成底本とは小異のある青表紙本。

以上11葉が源氏物語の切で、次に伊勢物語・狭衣物語・栄花物語の断簡を眺めてみる。



53 伊勢物語 20・21段 伝吉田兼好筆越前切  
斐紙四半切 (25.0cm×16.0cm)。和歌と写経  
とを柱とする古筆切の世界では、物語の断簡は  
5%以下と言うところであろう。名物切として  
珍重され格別の名称を持つものは、十指に満た  
ない。掲出の切は古くから越前切と呼ばれた大  
ぶりの四半列帖装断簡で、南北朝も早いころの  
堂々たる書風を見せる。『新撰古筆名葉集』に  
「大四半雲紙 伊勢物語八寸三分五寸四分」と  
見えるもので、掲出の切には装飾がないが、た  
しかに雲紙(内曇料紙)に写したものも存在す  
る。天福本の系統か。



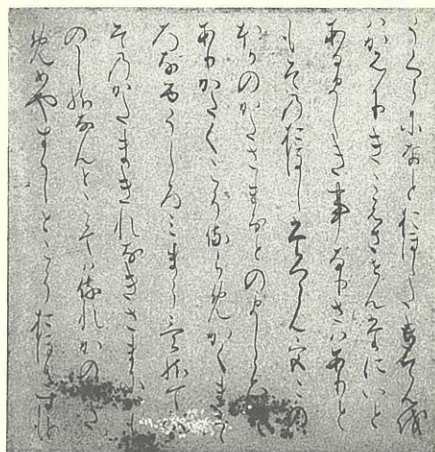
54 伊勢物語 96段 伝慈円筆  
斐紙四半切 (23.0cm×19.2cm)。天福本とは  
小異ある本文を1面7行21字程度に写す。極札  
は吞舟軒藤本箕山すなわち『色道大鏡』の撰者



笠原祥雨(1626~1704)のもので「慈鎮和尚のも  
ちはかり〔金山〕(ウラ印「哲斎」)」とある。鎌倉  
前期かと思われる手なれた書風。

#### 55 狭衣物語 卷四 伝阿仏尼筆

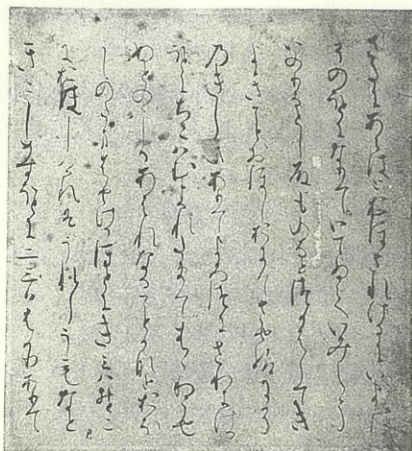
斐紙六半切 (15.3cm×15.0cm)。料紙下方に  
金銀の箔を雲のように蒔く特異なもので、類例  
はごく少ない。1面10行15字程度書写。古筆別  
家(了仲か)の極札「四条局阿佛うくらに〔守  
村〕」、裏書「阿佛四条局法名」。『新撰古筆名葉集』  
の「六半 金銀砂子紙 源氏コノ外類切多シ四  
寸九分」に相当するが、源氏物語ではなく、狭  
衣物語をこの装飾料紙の切は写している。同様  
の美しい紙の断簡は、藤井隆「古筆切と狭衣物  
語」(『講座平安文学論究』5)に徳川美徳館  
『藁叢』55とMOA『翰墨城』154の2葉紹介  
され、いずれも阿仏尼を伝称筆者とする巻四の  
切である。ただし『藁叢』所収分は掲出の切と  
同じく1面10行、『翰墨城』の方は11行、藤井説  
では両者別種で各々鎌倉中後期・鎌倉後期とす  
る。直接比較の機会がないので確定しにくい問  
題ではあるが、同一書写者が1面の行数を変え  
て写すことは珍しくなく、また『翰墨城』の切  
は無理に11行を押し込んだ風にも見られるので、  
料紙の共通性と書風から、掲出の切も含めた三  
者はツレと考えうるのではなかろうか。なお後  
考に俟つ。





56 栄花物語 巻12たまのむらぎく 伝冷泉為相筆

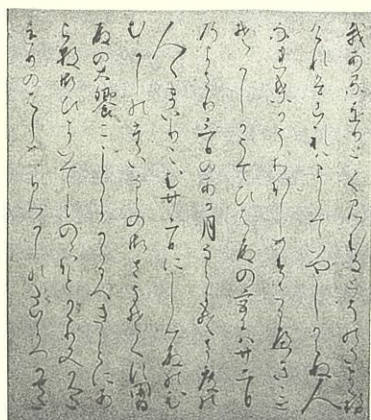
斐紙六半切（17.0cm×15.3cm）。西本願本系統に梅沢本系統が混在する特異な本文を1面10行16字程度に写す。鎌倉末期か。栄花物語の切は現在14葉が知られ、巻25・27に9枚が集中する。巻20以前のものは稀で、本文系統・書写年代の古さと共に貴重な1葉と言える。58の切とあわせて松村博司『栄花物語の研究 補説篇』に紹介された。



57 栄花物語 巻24わかばえ 伝藤原家隆筆

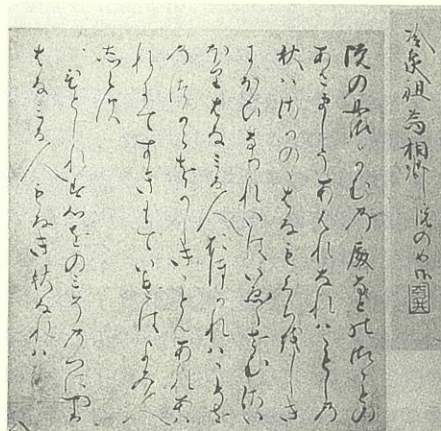
斐紙六半切（16.5cm×14.5cm）。現存諸本とは一致しない本文を1面10行16字程度に写す。朝倉茂入の極札「従二位藤原家隆卿我あるをり〔印〕」を付す。鎌倉中～後期の書であろう。新出資料、今回が本邦初公開である。巻24唯一の古筆切で、本文系統の位置づけがむづかしい。問題となりそうな個所を引く。

- ・おほしめさるへきことそかしかうて（伝家隆筆六半切）
- ・おほしめすさまなりかしかうて（西本願寺本）



58 栄花物語 巻27ころものたま 伝冷泉為相筆

斐紙六半切（16.6cm×15.3cm）。梅沢本と一致するところの多い本文を1面10行16字程度に写す。平井藤兵衛の極札「冷泉祖為相卿院の女御〔平井〕」あり。56の切と伝称筆者を同じくし、書写年代もほぼ同じであろうが、書風より見て別種と考えられる。前掲松村著参照のこと。



## 新刊あらかると

### ——情報科学・図書館学——

コンピュータ帝国の興亡 覇者たちの神話と内幕 R.X.クリンジリー著 アスキー 1993 (007.3/C)

データベース夜明け前 荒俣宏著 ジャストシステム 1992 (007.6/A)

図書館の力 森崎震二、戸田あきら著 新日本出版社 1993 (010.4/M)

一〇一冊の図書館 池内紀著 丸善 1993 (019/I)

略奪した文化 戦争と図書 松本剛著 岩波書店 1993 (020.2/M)

「国際コミュニケーション」としての出版 箕輪成男著 日本エディタースクール出版部 1993 (023/M)

### ——哲学・宗教——

自分を生かす自己催眠法 (講談社現代新書)

生月誠著 講談社 1992 (145.4/I)

心は遠くブッダのあとをつぎ 三蔵法師玄奘の旅 松原哲明著 佼成出版社 1993 (188.242/G)

禅学彷徨記 島田亨著 勁草書房 1993 (188.8/S)

### ——歴史・地理——

古代の南武蔵 多摩川流域の考古学 村田文夫著 有隣堂 1993 (201.025/M)

日本史再発見 理系の視点から 板倉聖宣著 朝日新聞社 1993 (210.04/I)

平安の朝廷—その光と影 笹山晴生著 吉川弘文館 1993 (210.36/S)

江戸はネットワーク 田中優子著 平凡社 1993 (210.5/T)

最近整理された資料の一部を紹介します。

書名(叢書名)、著者名、出版社、出版年、(請求記号)の順になっています。

蘇州 水生都市の過去と現在(講談社現代新書) 伊原弘著 講談社 1993 (222.21/I)

ニューヨーク拝見 バーバラ・コーエンほか編 白水社 1993 (253.21/N)

真贋 中居屋重兵衛のまぼろし 松本健一著 新潮社 1993 (289.1/N)

西藏漂泊 江本嘉伸著 山と溪谷社 1993 (292.2909/E)

ロンドンひとり暮らし術 岩野礼子著 晶文社 1993 (293.309/I)

### ——社会科学——

「頭脳国家」シンガポール 超管理の彼方に (講談社現代新書) 田村慶子著 講談社 1993 (302.2399/T)

新しい民族問題 EC統合とエスニシティ (中公新書) 梶田孝道著 中央公論社 1993 (316.83/K)

日本外交の軌跡 細谷千博著 日本放送出版協会 1993 (319.1/H)

華僑コネクション 樋泉克夫著 新潮社 1993 (334.522/H)

未婚化の社会学 大橋照枝著 日本放送出版協会 1993 (367.4/0)

子どものあそびと絵本—現代の児童文化 岡田純也著 中央出版 1992 (371.45/0)

バイリンガルの子供たち 唐須教光著 丸善 1993 (372.53/T)

大学<自由化>の時代へ 高度教育社会の到来 鷲田小彌太著 1993 (377.11/W)

モノの履歴書 吉井敏晃著 青弓社 1993 (383/Y)

黒髪と化粧の昭和史 広沢栄著 岩波書店 1993 (383.5/H)



——自然科学——

- さかな博士の遺言 末広恭雄の思い出 末広陽子著 丸善 1993 (402.1/S)
- いつ起こる小惑星大衝突 恐竜絶滅と人類の危機をさぐる 地球衝突小惑星研究会著 講談社 1993 (445.4/I)
- 白亜紀の自然史 小島郁生著 東京大学出版会 1993 (456.57/O)
- 熱帯植物散策 小林英治著 東京書籍 1993 (471.77/K)
- ボルネオの生きものたち 熱帯林にその生活を迫って 日高敏隆・石井実編著 東京化学同人 1991 (482.2435/B)
- 昆虫の擬態 海野和男著 平凡社 1993 (486/U)
- 医歯薬史雑録 谷津三雄著 医歯薬出版 1992 (490.21/Y)
- 彼岸花の鎮魂歌 女性医師の世界 大森安恵著 時空出版 1992 (490.4/O)
- 関節はふしぎ 構造からケガ・疾患、対処法まで 高橋長雄著 講談社 1993 (491.168/T)
- 薬物依存 ドラッグでつづる文化風俗史 中村希明著 講談社 1993 (493.155/N)
- 歯科の歴史おもしろ読本 長谷川正康著 クインテッセンス出版 1993 (D02/H)
- 姥捨の国 病院がなくなる日 斎藤磐根著 弘文堂 1993 (498/S)

——工学・産業——

- 大聖堂のコスモロジー 中世の聖なる空間を読む(講談社現代新書) 馬杉宗夫著 講談社 1992 (526.19/U)
- 日本のロケット 野本陽代著 日本放送出版協会 1993 (538.9/N)
- 岐路に立つ日本農業 二一世紀への選択 安達生恒著 有斐閣 1993 (612.1/A)
- ブナ林からの贈りもの 熊谷樵文、石橋睦美写真 世界文化社 1993 (653.7/K)

——芸術・スポーツ——

- 描写の芸術 一七世紀のオランダ絵画 S・アルパース著 ありな書房 1993 (723.359/A)
- トキワ荘の時代 梶井純著 筑摩書房 1993 (726.1/T)
- 書と文字は面白い 石川九楊著 新潮社 1993 (728.04/I)
- 江戸切子 その流れを支えた人と枝 山口勝旦著 里文出版 1993 (751.5/Y)
- 小津安二郎 新発見 松竹編 講談社 1993 (778.21/O)

——語学——

- 五十音図の話 馬渕和夫著 大修館書店 1993 (811.51/M)
- 漢字の博物誌 加納喜光著 大修館書店 1992 (821.2/K)
- クレージー・イングリッシュ リチャード・レドラー著 本名信行他訳 大修館書店 1993 (830.4/L)

——文学——

- 中世芸道論の思想 兼好・世阿弥・心敬 石黒吉次郎著 国書刊行会 1993 (910.24/I)
- 植民地と文学 日本社会文学会編 オリジン出版センター 1993 (910.26/S)
- 万葉集の民俗学 並木宏衛他編 桜楓社 1993 (911.12/M)
- 綾足と秋成と 十八世紀国学への批判 佐藤深雪著 名古屋大学出版会 1993 (911.34/T)
- 兜太のつれづれ歳時記 金子兜太著 創拓社 1992 (911.36/K-6)
- 評伝長谷川時雨 岩橋邦枝著 筑摩書房 1993 (912.6/H-6/I)
- シベリアの生と死 歴史の中の抑留者 坂本龍彦著 岩波書店 1993 (916/S)
- ギリシャ悲劇 古代と現代のはざままで 山形治江著 朝日新聞社 1993 (991.2/Y)

# 図書館だより

## ◎開館日のお知らせ（1月～3月）

### 開館時間

平日 9:00～19:00（但し、水曜日は9:30開館）

土曜日 9:00～16:00

●=閉館日

□=開館時間短縮日 平日 9:00～16:30（但し、水曜日は9:30開館） 土曜日 9:00～12:30

1

日	月	火	水	木	金	土
					①	
②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
⑨	10	11	12	13	14	⑮
⑯	17	18	19	20	21	22
⑳	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖

2

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	③	④
⑤	⑥	7	8	⑨	10	⑪
⑫	⑬	14	15	16	17	⑱
⑲	⑳	21	22	23	24	㉕
㉖	㉗	㉘				

3

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	③
④	⑤	⑥	7	8	9	10
⑪	⑫	⑬	14	15	16	17
⑱	⑲	⑳	㉑	㉒	㉓	㉔
㉕	㉖	㉗	28	29	30	㉙

## ◎視聴覚サービスのお知らせ

◇映学会 1月10日(月) 4:20～6:30

『ドラキュラ』

フランシス・F・コッポラ監督作品

\*下記の期間、視聴覚室は閉室です。

1月17日(月)～3月31日(木)

## Tsurumi University Librarians Associationのご案内

Tsurumi University Librarians Association（通称T. U. L. A.）は、司書課程を履修した卒業生を中心に図書館に関する情報交換の場として、1991年3月に発足した同窓会です。

現在は、年1回の総会と年2回の研修会を主な活動として、会員相互の交流をはかり、また、研修会では、図書館に関する勉強の場として、講演会や分科会、図書館見学などを行っています。研修会は学生の皆さんも参加できます。

当会に興味を持たれた方は、鶴見大学図書館内 Tsurumi University Librarians Association（吉田千登世）までご連絡下さい。 Tel. 045-581-1001 内264

アゴラ —— 鶴見大学図書館報 —— 第58号 1994年1月11日発行

編集・発行 鶴見大学図書館 丸山昭二郎

〒230 横浜市鶴見区鶴見2-1-3 ☎ 045-581-1001 FAX 045-584-8197

印刷／朝日オフセット印刷㈱ (045)511-0141